

4-11

各国のOlympic Movesと我が国での活動課題

○安光達雄¹, 工藤康宏², 野川春夫² (¹PCY, Ltd. ²順天堂大学)

本研究は、オリンピック・ムーブメントの一つとして2003年から開始されたOlympic Movesの各国における活動と日本での活動とを比較し、我が国での活動課題を検討した。IOCは、若年層のスポーツ離れを危惧して、コカ・コーラ社と共に若者の運動不足解消を目指したグローバルプログラムとしてOlympic Movesをオランダで開始し、その後ベルギー、韓国、日本と活動を拡大している(コカ・コーラ, 2015)。他国では、大規模なイベントとしてこの活動が行われているが日本では、個々の中学校の範囲内で行われており、一校ずつ一日限りで開催するため、スケジュールが決めにくく、スタッフ等の確保も難しい(Yasumitsu, Kudo & Nogawa, 2017)。2020年大会に向け行われている活動だが真田(2015)は、オリパラ競技会の開催以降オリンピック教育が継続される例はほとんどないと問題視している。オランダ等においてこの活動が無形の正のレガシーとなっているのには、国や教育機関、多くの賛同してくれる企業団体等により成立していることが窺える。この活動を日本において定着させていくには、活動資金、協力してくれる中学校の選定、誰もが楽しめるプログラムと指導法の作成等があげられ、産官学との連携や融合が必需であり、その産物として新たなプログラムやツール及び指導法等の開発が期待される。このオリンピック・ムーブメントが一過性のモノではなく、正のレガシーとして多くの中学校において継続して行われることが望まれる。

キーワード：オリンピック・ムーブメント、レガシー、不活発

<ポスター発表>

P-1-1

サイクルスポーツイベント参加者の満足度と再参加意欲に関する研究

○八木悠太¹, 伊藤央二² (¹和歌山大学観光学部², 和歌山大学)

【目的】奈良県で開催されたサイクルスポーツイベントにおいて、コース別(70km, 130km)の大会満足度の比較と、大会満足度と再参加意欲の関連性について検証することを目的とした。【方法】第8回奈良盆地一周シクロラリーの全参加者に、調査趣旨およびオンライン質問紙のURLリンクを含む電子メールを大会後に送信した。大会の全参加者数300名から114票を回収し、無効回答を除いた108票を有効回答としてデータ分析に用いた(有効回収率36.0%)。【結果・考察】t検定の結果、70kmと130kmの参加者間において「コースの難易度」、「チェックポイントの内容」、「沿道の応援」、「制限時間」の4項目で有意差が認められた。「コースの難易度」と「制限時間」では、フロー経験(Csikszentmihalyi, 2001)により130kmコースの参加者がより満足感を得ていたことが窺える。重回帰分析の結果からは、「名所・旧跡などの観光」のみが再参加意欲にネガティブな関連性が明らかとなった。これはチェックポイントに薬師寺や朱雀門があり、参加者が開催地域を十分に経験したという達成感を抱いてしまったためと考えられる。

キーワード：サイクルスポーツ、再参加意欲、満足度

P-1-2

静岡県在住高齢者の社会関連性指標と身体機能・精神機能との関連

○二宮茉優¹, 野中佑紀², 久保田晃生³, 村井美保子⁴, 稲益大悟¹, 萩裕美子³ (¹東海大学体育学部生涯スポーツ学科, ²東海大学大学院, ³東海大学, ⁴(公財)しずおか健康長寿財団)

【目的】地域在住高齢者の社会参加と身体機能・精神機能等との関連を明らかにした。【方法】対象者は、静岡県に在住する65歳以上から95歳未満の高齢者118名とした。調査期間は2016年5月11日～10月21日。分析項目は社会関連性指標、個人属性(性別、年齢)、身体組成(身長、体重、筋肉量、体脂肪率、BMI, Inbody点数)、身体機能(握力、開眼片脚立位時間、Timed Up and Go Test, 5m通常・最大歩行時間、下肢筋力)、認知機能、健康関連QOL、運動・食生活・社会参加・健康管理の自己チェック(シニア版ふじ33プログラム)である。統計解析は、社会関連性指標の得点で2値(高群/低群)に分類し、身体機能・精神機能等の結果についてどの項目に差があるかt検定を施し比較した。【結果及び考察】有意差が認められたのは5m通常・最大歩行時間、開眼片脚立位時間、握力、Timed Up and Go Test、体脂肪率、Inbody点数、SF12の7項目、自己チェック(運動、社会参加)であった。本研究の結果から、社会参加は身体機能・身体組成・精神機能等に好影響を及ぼす可能性が示唆された。今後、介護予防を進めるために、社会参加の機会が多い生涯スポーツを推進していくことは意義がある。

キーワード：社会関連性指標、横断研究